

第1回特別展

# 東南アジアのチョウ展

—鹿児島県のチョウとのつながりを中心に—



200mより浅い海域  
(この海域は氷河時には  
陸化したと考えられる)

昭和56年(1981)7月21日～8月2日  
毎日9:00～17:00(ただし、27日は休館)  
鹿児島県立博物館1階オリエンテーション室

鹿児島県立博物館

東南アジアのチョウを見ながら、その自然を考え、  
鹿児島県のチョウやその環境を見なおしてみましょう。

### この特別展の成りたちと見どころ

#### 1. 世界の中の東南アジア — 東南アジアチョウ相の特色 —

チョウは宝石を散りばめたように、南極大陸を除く地球の陸地で生活していますが、地域によってその顔ぶれがちがいます。東南アジアは、アゲハ・モンキチョウ・モンシロチョウ・マダラチョウの仲間が優勢な地域です。地球上でチョウが生まれた地域はどこだったのでしょうか。

北方のチョウが黒っぽいのは太陽熱を吸収し、熱帯のチョウがピカピカ光るのは強すぎる日光を反射するためといわれています。しかし、それだけでしょうか。

#### 2. 東南アジアと鹿児島

— 東南アジアから鹿児島にきたチョウ —

日本にいるチョウを、その分布状況から3群（シベリア型・日華型・マレー型）に分ければ、鹿児島県では日華型が主力であることがわかりますが、東南アジア系のチョウとしてのマレー型チョウ群も少なくありません。その中から特にツマベニチョウの分布と地理的・季節的変異を展示しました。本種はどのように地理的変異に未解決の問題があり、移動力や耐寒性についても不明の点が多く残されています。

分布を北方に拡大しつつあるチョウ（タテハモドキ・ナミエシロチョウなど）についても、その推移を見守らねばなりませんし、北方から南進のきざしをみせるチョウがいるかもしれませんので、この方面の調査も必要です。鹿児島県のチョウ相はかなり流動的な要素を持っているわけです。

#### 3. 鹿児島に南方から飛来するチョウ — 迷チョウ —

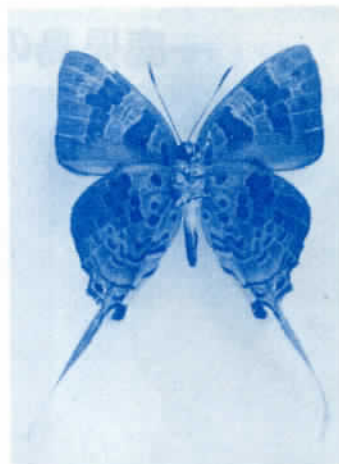
鹿児島県下で採集されたチョウ類135種のうち21種が、県内九州本島だけを考えると118種中22種（18.6%）が、いわゆる迷チョウです。

標本は県内で採集あるいは飼育されたチョウですが、彼らがどこから、どのようにして飛来するかなど問題はまだまだなぞに包まれており、ここに東南アジアのチョウ研究のひとつのねらいがあります。

そこで、この問題を性格の異なる2種で検討してみました。

##### (1) リュウキュウムラサキ

このチョウは、マダラチョウのように飛び、気流に乗りやすい移住性の大きなチョウですが、珍しく地理的変異があるため、出発地をある程度推定できます。



パラオオナガシジミ



トリノハカタヒバを食べるシマジャノメ幼虫

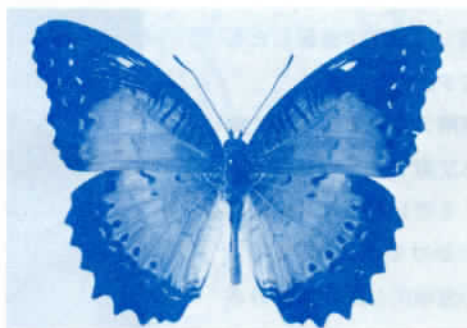
日本に飛来するのは台湾型とフィリピン型が多く、大陸型と赤斑型は少ないようです。しかし、出発地と推定される南方地域での調査は不十分ですし、飛来するチョウによる一時的な発生の有無や、異型間の交雑による斑紋の遺伝的解明が不可欠です。展示品はその一部を示しています。

また、本種は型によって雄が少なく雌が多いという異常性が認められ、これが移動とどのような関連を持つかという追求も必要ですから、あわせて飼育結果の一部を展示しました。

#### (2) ウスキシロチョウ

本種は力強くはばたき、大群をなして移動する習性をもつことが東南アジアで観察されていますが、鹿児島県下では1958年からほとんど毎年飛来し、一時的に発生するようになりました。

その原因のひとつは食樹（ナンバンサイカチ・タガヤサンなど）の栽植があると推定されますが展示では、フィリピン産と台湾産の間に地理的変異があること、ムモン型（定住型）とギンモン型（移動型）の2型が、幼虫期の日長・温度・生息密度などの条件で変化する可能性を示しました。



ウスベニハレギチョウ

#### 4. 東南アジアのチョウの生活(その1)

— 外敵から身を守る工夫 —

熱帯のチョウにとって外敵とくに捕食動物による淘汰は、われわれの想像を超えるものがあるようです。もし、現在のチョウの形や色が外敵に対する防衛戦略と関係が深いとすれば、いくつかの仮説を立てることができます。しかし、その検証はなかなか困難です。

展示品には成虫の「枯葉もよう」（カムフラージュ）、「目玉もよう」（警告）、「だましもよう」（擬態）の例をあげ、カバマダラを使ってミューラー型擬態のしくみを説明しました。

また、幼虫の防衛戦略の例としてタテハチョウ科の「幼虫が食草の葉の中脈を残して食べる習性」をもつグループを標本や写真で示しました。

#### 5. 東南アジアのチョウの生活(その2) — 森林の内と外 —

高温多雨で森林が発達しやすい熱帯・亜熱帯アジアの自然環境は、チョウにとって必ずしも楽園ではないようです。変化の少ない日長、年較差より日較差の大きい気温、気まぐれな台風、不明瞭な乾雨季などの気象条件、それに影響を受ける植物界の変化、さらにヒトによる環境変革などへ、チョウはどの程度適応しているのでしょうか。

森林の中でしか生活できないチョウは、いま急速にすみかを失ないつつあります。シダ植物のイワヒバを食草とするジャノメチョウ2種は、単子葉植物しか食べないとされていたジャノメチョウ科の異端者ですが、ここには世界最初の発見となった記念すべ標本や写真を展示しました。

森林の外は主にヒトによって作り変えられた環境（オープンランド）で、ここに住むチョウは広く分布しているものが多いようです。日本に飛来する迷チョウも、ほとんどこの環境の生活者で、迷チョウがふえたのはヒトによる環境破壊の結果だという考え方もあります。

## 6. フィリピンのチョウの生活史

東南アジアのチョウの生活史、すなわち卵→幼虫→蛹→成虫という完全変態の過程や幼虫の食物（食草・食樹）は、まだごく一部しか判明していませんが、ここには1973・1978年の調査で明らかになったフィリピン産約80種の中から、めばしいものを展示しました。

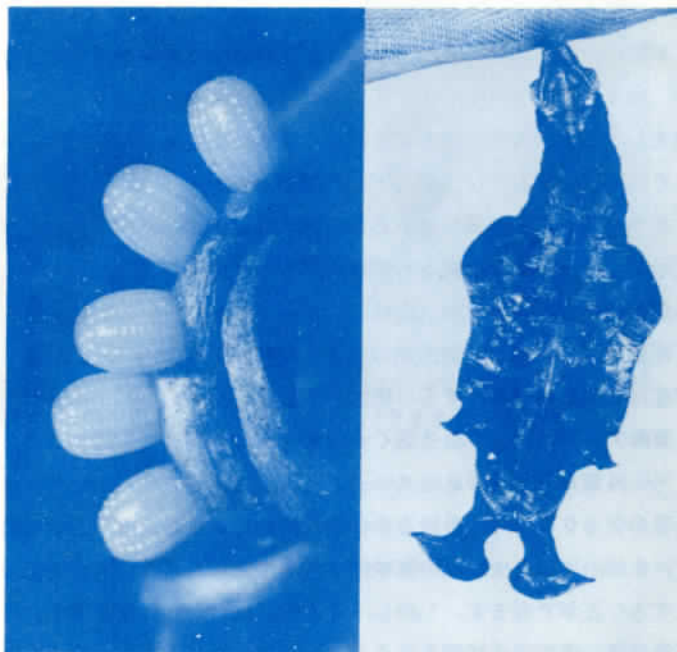
幼虫が脱皮した時に残した頭のからや、羽化後の蛹のからが研究材料として役立つことがわかります。また、幼虫や蛹も色や形がさまざまで、それぞれ生きる工夫がこらされているようです。

### 付) 壁面の写真

1978年8月、太平洋戦争激戦の地、フィリピン群島レイテ島で撮影したものです。

### 東南アジアのチョウに関する文献

19世紀から20世紀前半にかけては、ヨーロッパ人の意欲的な研究が注目されます。近年は現地の学者や日本人研究家の活躍が目立ちます。



オナガチャイロヒョウモンの卵      チャイロイチモンジ1種の蛹

出品作品は、当館学芸主事福田晴夫と鹿児島昆虫同好会会員の収集によるものです。標本を出品あるいは提供していただきました亀山 充、伊達常雄、坂上凱子、江田信豊、小山田善次郎、櫛下町鉦敏、二町一成、村岡宏章、尾形之善氏ほか鹿児島昆虫同好会会員の方々に厚く御礼申し上げます。

(MEMO)

表紙の地図は大阪市立自然史博物館特別展(1970)のパンフレットより引用

鹿児島県立博物館(鹿児島市城山町1-1 〒892) 電話 23-6050

1981年7月21日発行